

世阿弥研究この一年

天野文雄

昨年一月から始まった本誌の世阿弥生誕記念企画の第一回に、昭和三十八年の世阿弥生誕六百年以後五十年の世阿弥研究の概要と爾後の課題についての稿を寄せたところ、さいごに、この一年の世阿弥研究の回顧をという依頼が編集部からあった。本誌をはじめ、この一年、世阿弥生誕に事寄せた企画が能界や研究界に多かったことをふまえての依頼と思われるが、あらためてこの一年を振り返ってみると、能界のほうはそれなりに賑やかだったものの、研究のほうは世阿弥生誕年にしてはやや元気がなかったように思う。

それと言うのも、昭和三十八年の生誕六十年の世阿弥研究がまことに多彩で、研究史上でも画期的な一年だったからである。そもそも、六百年のおりには、驚くほど多くの研究誌や能楽関係誌が世阿弥特集を組んでいる。たとえば、創刊以来、世阿弥や能に強い関心を向けていた『文学』は一月号を世阿弥特集として、香西精「世阿弥時代の能と今日の能」、表章「世阿弥の生涯をめぐる諸問題」、江島伊兵衛「新出本「五音下」その他」など研究史を彩る論をはじめ、小西甚一、伊藤正義、草深清、

西尾実、米倉利昭、村井康彦、中村保雄、片山博通、タカクラ・テルといった諸氏の論とエッセイ、それに座談会「世阿弥研究の回顧と展望」(西尾実、森末義彰、古川久、横道萬里雄、表章)と、同号のほとんどを世阿弥にあてている。同じ一月には、学燈社の『国文学』も世阿弥特集を組んでいる。そこには、久松潜一「世阿弥の芸術論—幽玄と妙花風」、安良岡康作「中世文学史上における世阿弥」、香西精「世阿弥と禪」、峯村文人「世阿弥と歌道」、斎藤清衛「世阿弥能楽論の展開」、金井清光「風姿花伝の成立」、黒田正男「花鏡」、伊藤正義「世阿弥と禅竹」、岡本芳江「六義」再考」など、計十九本の論が載る。一方、檜書店の『観世』は、六月から十月まで五回にわたって、いまも語り草になっている座談会「世阿弥の能」(表章、観世寿夫、観世元正、香西精、小西甚一、斎藤太郎、檜常太郎、横道萬里雄)を連載している。同誌には昭和三十八年には、この座談会のほかは、単発で荒木良雄「世阿弥と歌道—松浦之能」を中心に、永島福太郎「世阿弥と大和」、研究ではないが片山博通「新作能 世阿望憶」などが載るが、翌昭和三十九年一月号に、表

章「世阿弥は貞治三年生まれ—今年こそが生誕満六百年」が載り、それを承けてであろう、同年二月と三月に、現在も一読に値する世阿弥生誕六百年記念座談会「世阿弥の一生」(赤松俊秀、金井清光、香西精、永島福太郎、村井康彦、林屋辰三郎)を載せている。なお、同誌は、昭和三十七年から「世阿弥研究シリーズ」と銘打った連載を始めているが、もちろんこれは翌年の生誕六百年を視野に入れての企画である。また、同誌は昭和三十五年から四十年まで、やはり生誕年を視野に入れた「世阿弥隨筆」として二本のエッセイや小研究を巻頭に掲載しているが、三十八年、三十九年には、コラム名を「世阿弥生誕六百年に当たって」と改めている。『観世』誌は六年ないし二年にわたって生誕記念企画を組んだわけである。また、本誌『鎮仙』は、昭和三十八年には今回のような企画はなかったが、表章による連載「百々裏話」の多くは世阿弥にかかわる論であり、昭和三十七年には、座談会「世阿弥と現代—九位次第を中心に」(小西甚一、横道萬里雄、観世寿夫)が七回にわたって掲載されている。

生誕六百年には、流儀の機関誌も意欲的に世阿弥を取り上げている。『金剛』は五月に香西精「世阿弥の芸論について」、久保文雄「世阿弥の生誕」、田中重太郎「世阿弥の悲劇」を、九月に林屋辰三郎「世阿弥の能」、北岸佑吉「世阿弥の作品」、西一祥「佐渡の世阿弥」と世阿弥一色だった。『金春』も六月に表章「世阿弥と氏信」、西一祥「現代に生きる世阿弥」、金春欣三「世阿弥に関係ある新資料の発見」などを載せ

る。『金剛』の香西稿はいまも必読論文、久保稿は研究史に残る論文である。さらに特筆すべきは、六月の観世会の生誕記念と銘打った浩翰な公演パンフレットで、その内容は、小西甚一「世阿弥は死なず」、小山弘志「能と現代」、池田廣司「復曲 松浦佐用姫」、浅見真健、三宅藤九郎「新作 面塚」、座談会「能・世阿弥・現代」（田中千禾夫、観世寿夫、石沢秀二）、渡邊守章「シッフェール教授による世阿弥の翻訳をめぐる」、生誕六百年記念能聖世阿弥展「目録・解説・図録、片桐登「世阿弥伝書解説」、表章「観世宗家蔵世阿弥伝書一覽」というものである。

これにたいして、生誕六百五十年の昨年はどうであつたかという、管見では、研究面で世阿弥特集を組んだのは、『観世』と『鏡仙』くらいかと思う。五十年前に充実した世阿弥特集を組んだ『文学』は、今回は世阿弥を取り上げなかった。昭和三十一年創刊の歴史をもつ学燈社の『国文学』は平成二十一年に廃刊となり、『金剛』も現在は刊行が途絶えている。もつとも、広く雑誌を見渡すと、『芸術新潮』が平成二十四年十二月に、「観阿弥生誕680年、世阿弥生誕650年記念」として、「はじめて観る能」を特集し、少し溯れば平成二十二年には『別冊太陽』の「世阿弥」特集があるが、これらは能にあまりなじみがない読者を対象にした概説的な内容である。これにくらべると、生誕六百年の研究誌や流儀の機関誌がいかに意欲的に世阿弥を研究対象として取り上げたかが知られる。この違いはなにによるの

であろうか。さしあたり思いつくのは以下の三点である。

①世阿弥や能にたいする研究的側面への関心の低下（とかく難解なものを敬遠するという社会的風潮が能楽界にも及んだということ）。

②生誕六百年が能楽研究や世阿弥研究の大いなる進展期にあつていったこと（近年は江戸時代や近代の能楽にも関心が広がり、その分世阿弥研究が減少したこと）。

③研究一般の細分化により、世阿弥研究、能楽研究が他の人文学領域の研究を触発することがなくなり、他分野からの世阿弥研究、能楽研究への参入も少なくなつたこと（六百年の論考執筆者が多彩なものを想起されたい）。

それでは、希少な存在となつた六百五十年の『観世』と『鏡仙』の世阿弥研究にはどのようなものがあつたのか。

『観世』は、「観阿弥生誕六百八十年、世阿弥生誕五百六十年、能の大成者たち」として、小川剛生「世阿弥の少年期（上）―「不知記」（崇光院宸記）を読み直す―」（四月）、同「世阿弥の少年期（下）―醍醐寺と新熊野社―」（五月）、小林康夫「『あら暗の夜や』―通小町をシネマ風に」（六月）、竹本幹夫「観阿弥時代の謡と能」（七月）、小田幸子「観阿弥から世阿弥へ―関寺小町をめぐって」（八月）、三宅晶子「創成期の能の魅力―夢と現の間」（九月）、松岡心平「『鶴羽』のなりたち」（十月）、天野文雄「世阿弥の『砧』続考」（十一月）、馬場あき子「世阿弥と和歌」（十二

月）の諸論。一方、『鏡仙』の生誕記念企画に寄せられたのは、天野「世阿弥」はどれだけかわれわれのものになつてゐるのか」（一月）、田口和夫「世阿弥自筆本（雲林院）の改作から」（二月）、重田みち「世阿弥を総合的に捉える」（三月）、岩崎雅彦「世阿弥能楽論語彙の考証について」（四月）、高桑いづみ「返シを謡うということ―小段形成の一手順―」（五月）、小田幸子「世阿弥時代の『船』」（六月）、三宅晶子「住するところなき世阿弥」（七月）、宮本圭造「伊賀観世系譜の虚実」（九月）、表きよし「世阿弥忌と補巖寺」（十月）、松岡心平「世阿弥と満濟」（十一月）、竹本幹夫「世阿弥夢幻能の成立小考」（十二月）の諸論である。これを分野でみると、もつとも多いのが作品論で十本ほど、あとは事績研究が四点、芸論研究が二点、演出研究、音楽研究が各一点である。

もちろん、これ以外にも世阿弥研究はある。管見に入つたものを、これも分野別にあげると、作品論では、梅原猛、観世清和監修、松岡心平、天野文雄らを編集委員とする角川学芸出版の全四巻からなる『能を読む』の第二巻「世阿弥」がある。同書は、梅原「世阿弥の能ⅠⅡ」、松岡「鬼と世阿弥」、天野「世阿弥の芸術的革新」、土屋恵一郎「砧―夢幻能からの修辭学的逸脱」、馬場あき子「世阿弥と修羅能」の諸論、筆者の担当になる現行観世流詞章をもとにした世阿弥の能三十六曲の現代語訳と注、それに観世清和、近藤乾之助、梅若玄祥らと監修、編集担当者との世阿弥作品をめぐつての座談会で構成されている。これ以外では、

西野春雄「観阿弥・世阿弥・元雅―その作風をめぐって―」（『国立能楽堂』四月）がある。事績研究はすでにあげたもの以外には、天野「佐渡の世阿弥」（『国立能楽堂』十月）くらいであろうか。世阿弥の芸論研究では、重田みち「『風姿花伝』奥義篇書き換えの経緯再考―田楽本座の役者一忠の記述及び能の名望論について―」（『芸能史研究』二〇三）、天野「五月十四日付世阿弥自筆書状の「時」―自筆書状から窺える禅竹の芸位をめぐって―」（『国語と国文学』二月）、『花伝』第六「花修」をめぐる諸問題」（『国学院雑誌』十一月）がある。

また、まだ活字にはなっていないが、能楽学会も五月の大会では、「世阿弥をめぐる和歌・連歌の世界」をテーマに、八月の奈良での世阿弥忌セミナーでは、『能本三十五番目録』をめぐって「世阿弥作品の再検討」をテーマに世阿弥を取り上げた。具体的に紹介したいところだが、紙幅もないので、その内容については今春発行予定の『能と狂言』十二号にゆずる。

「世阿弥研究の一年」と題しながら、分量の上では昭和三十八年の生誕六百年の動向に多くを費やし、六百五十年のそれについては、論稿の羅列にとどまって、その評価にまで及ばなかったことを遺憾とする。また、この種の研究動向は、本来なら「この十年」くらいの幅が必要でもあろう。もっとも、世阿弥の生誕六百五十年は今年の可能性もあるのだから、そのような本格的な評価は「この一年」の成果を待ってからでも遅くはないであろう。

（大阪大学名誉教授）